慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	沢田氏の論評に答える：ふたたび「日本語の論理構造の問題」をめぐつて
Sub Title	A Reply to Prof. N. Sawada
Author	大出, 晁(Oide, Akira)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.41 (1961. 12) ,p.239- 243
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000041-0252

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

沢田氏の論評に答える

―ふたたび「日本語の論理構造の問題」をめぐつて―

大　出　　晁

私がまえに「哲学」第37集にかいた『「は」と「が」について』という論文に対して，沢田允茂氏が同誌第40集に論評をかかれている．編集部からの依頼もあり，私もこれを機会にのべておきたいこともあるので，ふたたびこの問題について一筆することとした．

私がこのまえ日本語についてかいたときに，なにかうなぎでもつかまえようとしているいらだたしさにおそわれた．いまふたたびこの問題をとりあげるのにあたつて，私はやはりおなじような感じをおぼえる．言語のある程度の規則性と，またある程度の自由さとが私をとりとめのない感じにおいやり，そしていらだたせるのである．われわれは毎日日本語をもちいて生活しているにもかかわらず，われわれはどこからどこまでが日本語であり，どこからどこまでがそうでないのかはつきりいうことができない．ある言語においてぜつたいに許されない表現というものはそんなに明確でないのである．そのために私は前の論文をかいたときに，そしていまでもひじように安心できない気持でいる．その点では沢田氏がある程度私の結論を認めて下さつたことはある種の安心感をあたえた．ところで沢田氏が私の論文の要点を紹介されながら，「日本語はフランス語などより論理的でないという結論を導き出している」という点は，私の意図とはすこしちがう．私のいいたかつたことの主な点は，(1)「は」と「が」は変項の領域を決定するのであつて，そのような領域間の相互関係をあきらかにしないこと，(2)変項の保持が一定性を欠く危険のあること，(3)「が」の用法はある文脈においては記述論を用いる必要のあることの3点であつた．日本語が他の言語に比べて論理的でないということは多分に私の感想であつて，理論的結論ではない．そのようにうけとられる危険のある書きかたをしていれば，それはたしかに私の責任であるが，私の論文の目的は必ずしもそこになかつたことを，弁解めくがこれを機会にのべておきたい．

さて，沢田氏の指摘された問題点について，その順にしたがつて私の考えをのべさせて頂く．

A．日本語のみが「よみこみ」を必要とするかどうかについて．

私は日本語のみが「よみこみ」を必要とするといつたつもりはない．私の考えではむしろすべての言語が「よみこみ」を必要とするであろう．私がのべたのは，日本語の「は」と「が」からなる標準的構造の文においては，「よみこみ」が顕著であるということである．ただ言語のもつ不明確さから，この標準的構造というものをはつきりと規定することができない．この点については「普通のいいかた」といつた範囲で統計的にでも処理するより仕方がなかろうと思う．いずれにしろ，私はそのような表現をはなれて一般的に日本語は「よみこみ」を必要とする，まして日本語のみがそうだなどと主張するつもりはなかつた．その点では，たとえば英語において日本語より「よみこみ」を必要とする場合がありうるということを私は否定するつもりはない．

ただ沢田氏のあげられている三つの例について，私は次のように考えている．

1) We enjoyed a nice cup of tea.

2) He throws a pretty dart.

3) He drives a long ball.

これらの例は，形容詞の修飾する名詞を（(1)の場合），または形容詞を副詞に（(2)，(3)の場合），それぞれかえてやる必要を示していると沢田氏はいわれる．しかし，これは私のいつた「よみこみ」とは少しちがう．「よみこみ」とは言語表現にあらわれていないものを表現のうちによみこんでやるのであるが，ここでは言語表現のうちにあらわれている表現をかかりをかえてよんでやるのであるから，私はむしろこれを「よみかえ」とよびたい．ところがこの「よみかえ」は日本語においてもおなじようにおこる．たとえば，

4) 彼は出ていつたかと思うと，すぐ立派な果物の籠をもつてかえつてきた．

この文章では，「立派な果物の入つた籠」であるのか，「果物の入つた立派な籠」であるのかよく分らない．つまり場合によつては「立派な籠」とよみかえてやる必要がある．また，2)，3) について，沢田氏が例をとられた Vallins の Good English には「主としてスポーツ用語で」とかかれている．ところが，たとえば，

5) 金田はいい球を投げたので，長島に打たれた，

6) 慶大クルーはうまい舵をひいて先行した，

といつた例はスポーツ用語としておなじみの表現である．しかし，この「いい」とか，「うまい」とかは球や舵そのものにかかつているわけではないであろう．日本語でもスポーツにこの種の表現がみられるのは不思議である．この点で，「よみかえ」がとくに英語では要求されることを示すために出された例としてはあまり適当でないように思われる．日本語でも「彼はみごとな槍を投げる」という表現がスポーツ欄にあらわれれば，その槍が重要文化財などであるはずもないか

ら,「槍のみごとなとび方」と理解するのではないかと思われる．槍投はあまりスポーツ欄に登場しないから，この種の表現は慣用的ではないが．

私がこの種の例に関して指摘しておきたいのは，沢田氏のとられた Vallins の解釈に対する疑点である．私の考えでは，2), 3) の pretty や long は throws や drives にかかるものではない．日本語の 5) の例でわれわれが考えるのは，「いい」は「投げる」にかからないということである．たとえば，

7) 金田はよく投げたので，長島に打たれた，

では意味が分らなくなつてしまう．この「いい球」というのは「ホーム・ベース近くの球の位置，速度，その他の状態」を球について（あるいは打者との関連において）表明しようとしているのではないだろうか．「投げる」金田は，球が手元を離れたら，「投げた」ことをのぞいてあまり意味をもたないのである．そこから「金田が投げる」ことよりも，「球」のその後の状態が重要となつて，副詞にするとうまくいかなくなつてしまう．2), 3) についても副詞にしたのでは同様の差異がでてくるのではないかという気がする．2) では「槍投げのフォーム」やなにかではなく，「槍の安定した飛び方」といつたものが，3) では「球のとんだ距離」が問題なのであつて，これを副詞の形でいうと，動作にかかつてしまうために意外にむずかしいのではなかろうか．この点は記号化すれば，差異はもう少しはつきりすると思うが，それには立ちいらない．しかし，もし動作とその対象とがわけにくいときには副詞的表現と形容詞的表現の間には区別がつけにくくなる．

7) 大鵬はうまい相撲をとつた．

8) 大鵬は相撲をうまくとつた．

ここでは力士の動作をはなれて相撲はないであろう．

B．「は」と「が」と主題の提示について．

「は」と「が」が主題の提示の問題に関係があることは国語学者もいつているし，私も論文のうちで (pp. 145-146) ふれておいた．「自然演繹」の形を中心とする考察もこの問題に対するアプローチのひとつの試みであつた．それと関連して「は」の決定する変項領域は「が」の決定するそれをこえる性質のあることも，とくにかかりの問題を中心に論じておいた．それゆえ，simplicity の問題を別にすれば，沢田氏の見解は私の主張と一致していると思う．simplicity については，異なる言語を simplicity の観点から比較するのは容易でないと私は考える．もつとも簡単なのは，それぞれの言語を構成する字数（アルファベット）の少ない方がより単純であるという方法であろう．この方法ではただちに日本語は英語より単純でないと結論されよう．こんな簡単にすぎる方法でなく，もう少し内容のある基準をとろうとすると困難は大きくなる．とくに言語の構造が介在してくるときには，それぞれの言語はそれぞれの構造をもつから，それをこえた共

通の基準をどこに求めたらよいかという問題は容易ではない．この点が明確にされぬかぎり，simplicity について論ずるのは水かけ論になる危険性が多い．

C． 沢田氏の I) およびそれに関する意見について．

I) について私はべつに異議のないことは，すでにのべたところからあきらかであろう．しかし，それに関して沢田氏がのべていられることのうちに，「『論理性』とは変項領域の一義性のみをさしているかどうか」という言葉があるが，もしこれが私の立場を意味しているのだとしたら誤解である．私は「『論理性』とは変項領域の相互関係の一義性のみをさす」などと考えたこともない．私は変項領域の決定もまた，論理的にいつても，日常言語にとつても重要であると考える．しかし，日常言語にとつて，変項領域の相互関係もまた重要な情報となると思う．もちろんこれは沢田氏も否定されぬであろう．ただ，変項領域の決定の時間的な先後は，論理的というよりは心理的な問題ではなかろうか．少くとも記号論理的な見地からは，変項領域が決定されているかいないか，どの範囲においてか，またそれら領域が相互にどのように関係しているかが問題であつて，それがどのような時間的順序においてなされるかは問題にならない．これに関するもうひとつの議論は結論の部分にゆずるが，私には沢田氏のいわれる「カテゴリーの正確さとち密さおよびその一義性」ということが一体どのようなことを意味しているのか分らないし，カント的な表現における論理の理念とどうむすびつくのか分らないので，この点について御教示頂ければ幸いである．

D． 沢田氏の II) およびそれに関する意見について．

私は日本語のみが「よみこみ」を必要とするとのべたつもりはないことはすでにのべた．その点 II) を私の論文に対する反論としてではなく，主張としてみれば同意見である．II) に関する意見のうちで simplicity についてはすでにのべた．そしてここでのべられているような意味で私も言語から「よみこみ」はとりさりえないだろうと考えているのである．ただし，あるひとつの言語における simplicity の基準と異なる言語間の比較の場合のそれとは比べものにならぬほど後者の方が困難だろうと思う．その点で「ある言語が simplicity をたもつために」という時の simplicity は，そのまま言語間の比較の場合に拡張できないと私は考える．さらに，「日常言語の目的に対する合理的な—そしてその意味において論理的な手段」という一節には疑問がある．たとえば，「彼は合理的な生活をしている」とはいつても，「彼は論理的な生活をしている」とはいえない．それゆえ，「合理的」なことを指摘することはそのまま「論理的」であることを指摘することではないであろう．「論理的」ということがそれほど明らかなものでないからこそ，私は記号論理の体系を基準にとつた．それ以上に不明確な合理的という語を用いて，しかもそれを論理的ということに関係させるためには，まず「合

理的」ということを必要の範囲で明らかにして頂きたいと思う．

E．結論の部分について．

私は「論理性」を syntactical な面にかぎつたつもりは全然ない．日常言語の記号化を試みることがすでにふつうの用法では semantical な領域に入る．私が pragmatical な面からの考察をしなかつたのは事実である．もともと言語はこの側面を有していたからこそ，このような分類が発生したのである．その意味ではひとつの側面を欠くことはその面を無視したことになろう．しかし，現代の記号論理はその面を無視することによつて，どうやら昔よりもいわゆる「論理的」な面に接近したのである．それゆえ，もし必要となれば，pragmatical な面からの考察を試みることを私は拒むものではないが，ただしそれによつて失うよりも得る処が多い場合にかぎりたいというのが，私のいまの気持である．このような考え方は，現在のようなまだ欠陥の多い機械についてモデルとしての意味を認めていられる沢田氏には充分納得して頂けると思う．ただ，「英国人と日本人のどちらが頭がいいか」というのが意味のない問題であり，「日本人も英国人もそれぞれの仕方で頭がいいのだから……」という節は私には諒解できないので，この点についても御教示頂ければ幸いである．

結論的にのべるならば，沢田氏と私の間には沢田氏の指摘された I)，II) という点に関して意見の差がないにもかかわらず，全体からみて差異があるように思われる理由は，「変項領域の相互関係の一義性のみ」と「日本語のみ」という沢田氏の二つの表現にあらわれるのみに関係している　私が前の論文でのべたのは，記号論理を基準にとれば，「日本語が論理的であるならば，日本語の記号化において変項領域の相互関係は決定されていなければならない」という必要条件を明らかにすることであつた．私はこの他にありうる必要条件を否定したのではなくてふれなかつたにすぎない．沢田氏の論評はこれを充分条件の形におきかえて，そのようにかぎられた論理性はせますぎることを主張されるようにうけとれた．私は，私自身充分条件の形で主張したつもりはないし，充分条件を論ずる前に必要条件であきらかにされるものがまだあると考えている．私が沢田氏の指摘される点に同意しながら，その主張には同意しない基本的な点はこの点にある．論理性の意味の拡張の必要性については，この論評に示されているかぎりでは，私は納得しないが，その必要がもしあるとしても，その前にいまの基準のままでしなければならぬ仕事があるというのが私の立場である．